

〔論 説〕

孝謙・淳仁両天皇の即位年の決定法

—『続日本紀』と聖数(5)—

江 口 洸

はじめに

天皇の即位年(月日)がいい加減に決められるはずはなかった。いわんや讓位という場合は、それが何時なされるべきか、その日時決定は重要事であつたはずだ。

『続日本紀』時代のことである。天皇の即位年はどのようにして決められたのだろうか。

この類の質問に対して、今までに与えられた情報は「それは卜占によって吉凶が決められた」と言うぐらいしかなかった。また、先帝が、その年の前半ごろまでに崩御した場合は、その年の後半に、そして、その年の後半に崩御した場合は、次の年に次の天皇が即位するのが一応の基準になっていたらしい、というような説明が加わるだろう。しかしこれは例外も多い。

即位年の決定法、つまり、その年次がどのようにして決められていったかについて、今までの歴史学では言及できなかった。しかし、わたくしは、『日本書紀』(以降、『書紀』と略す)の紀年研究を通して見て、上古代の天皇の即位年また崩御年は、『書紀』完成期の天皇たちから発せられる神聖数によって決められたことを明らかにしてきた。

ここでは、『書紀』より後の、奈良時代の天皇である孝謙天皇と淳仁天皇とを取り上げて言及する。天皇の聖数が、過去へ遡って日本の上古代史を創ってきたばかりでなく、『書紀』以降も、その聖数が歴史を動かしつつづけていたことを説くことになる。

孝謙天皇は、父聖武天皇からの讓りを受けての即位、淳仁天皇(以降、多くの場合、天皇号を略す)は、孝謙からの讓位であつた。両天皇の即位年(月日)がどのように決められたかについて論じてみたい。

天皇の即位年の決定法に関して、ここでは、三つの時間に分けて言及していく。一は、上古代天皇の即位年を決定した『書紀』の紀年構成法。二は、聖武の即位年の決定法。三、四は、一と二を見通しての孝謙の即位年決定法、淳仁に関しては、その即位年と、その即位日の決定法に関して触れる。

一と二に関しては今までに触れたところであるが、三、四についての理解を得るために、ここでも繰り返して説くことも多い。

『書紀』は天皇史である。各代天皇のそれぞれの事績の記述の中でも、歴史を組む上で最重要である各天皇の即位年、崩御年(又は讓位年)は、特に注意深い配慮が払われている。欠史八代と呼ばれる2代から9代までの天皇に関しても、その即位年、立太子年、崩御年は、きちんと記されている。

神武天皇は西暦紀元前660年1月1日即位したと知ることができる。しかし、それが真実を伝えたものであるとは思っていない。『書紀』は、史書たらんとして、また歴史の長さを誇らんとして、歴史を組み上げている。組み上げている、と書いたが、どの時点に基準を置いているのだろうか。

わが国の紀元はなぜに前660に設定されたのかについては、辛酉革命説に拠っているのだという、誤った歴史観によつて説明されてきた。それ故に、長い間、『書紀』が書かれてから1300年近くも、『書紀』がなした紀年構成の真実を捕捉できないできたのだった。真実は、その紀元も、また多くの歴史的な事項も、天皇家が神聖視した聖数によつて計算されて決められていたのであった。

まず、わが国の上古代史の紀年構成は、聖数で構築されていること、そして、その聖数の起算点は、『書紀』完成の最終期の天皇たち、文武天皇以降の、元明、元正、及びその時の皇太子であった首皇子（聖武天皇）の予定されていた即位年であったこと、これまで繰り返し説いてきたところであるが、その事を認識してもらうことから始める。

一 古代史の聖数

聖数にはふたつの種類がある。

一は、天皇の日の皇子思想に基づいていて、天皇の存在を太陽と重ねるとして用いられた。暦の上に捉えられた太陽の再生に関わる数字（一九年七閏法の数字等）である。

二は、政治思想である三才思想（天・地・人）に関わる数字である。天と地との和の数字である（注1）。

聖数の用い方を理解してもらうために、少し例を挙げる。まず重要な年次を挙げておく。

神武即位年（紀元Ⅱ西暦前660年）

天武即位年（673）

持統即位年（690）

文武即位年（697）

元明即位年（707）

元正即位年（715）

聖武即位年（724）

まず一、神武天皇と天武天皇との関係を挙げる。二天皇の時間的な関係は、

神武即位年

⇨ 1332年（三六五年×365／100）

天武即位年

と書ける。神武から天武までは1332年の時間がある。その数字は、三六五という一太陽年を示す数字で結ばれている。偶然ではないだろう。三六五×365／100は、精確には1332.25となる（注2）。

わが国の紀元は、右の、神武と天武との関係でのみ決定されたのではない。天武以降の天皇方が、それぞれ次のような関係を持っている。

神武即位年

⇨ 満1349年（一九年×71）

持統即位年（690）

神武と持統とは、同じく1月1日即位日であるので、満計算で1349年となる。

神武と文武とは、天地の和の数が一七が用いられている。

神武即位年

⇨ 1357年（二三年×59）

文武即位年（697）

となっている(注3)。

神武の崩御年の方も見ておきたい。

神武崩御年(前585)

⇨1258年(一七年×74)

天武即位年(673)

神武崩御年(前585)

⇨1275年(一七年×75)

持統即位年(690)

神武崩御年(前585)

⇨1292年(一七年×76)

元明即位年⇨文武崩御年(707)

となっている。天武以降の天皇方が一七年という間隔年数置いて即位し、また崩御している。本当だろうか、疑わしい。一七年という聖数が先行して、歴史を組み立てているのであろう。従って、『書紀』編纂時に、天武や持統でさえその即位年などが動かされている、その可能性が高い。

さらに、その他の聖数でも関係線が創られている。元正の場合(別の書式で示す)は、

神武誕生年(前711)+1426年(二三年×62)⇨元正即位年

神武崩御年+1300年(二六年×50)⇨元正即位年

神武は大祖霊であるので、『書紀』完成期の全部の天皇たちから聖数関係を求められているのだ。

この聖数関係(「威霊再生の関係」)で、求められる祖霊たちは、神武だけではない。次に二代天皇綏靖を見てみる。綏靖即位年(前、581)は、

綏靖即位年

⇨1254年(一九年×66)

天武即位年(673)

綏靖即位年⇨

⇨1288年(二三年×56)

元明即位年(707)

そして、一方の崩御年(前549)は、

綏靖崩御年

⇨1222年(二六年×47)

天武即位年(673)

綏靖崩御年

⇨1273年(一九年×67)

聖武即位年(724)

と組まれている。このような関係を創るために、綏靖は前581年に即位させられたのである。そして、神武崩御年と綏靖即位年との間には、3年もの天皇空位年が生じてしまった(注4)。

二 聖武即位年の場合

次に、聖武の聖数関係を『書紀』の中に見てみたい。

720年完成の『書紀』に、その当時の皇太子であった聖武への配慮が全くなかった、と考える方が幼稚だ。『書紀』完成の1年前には、首皇子（聖武）は初めて朝政を聴いている。それに聖武の外祖父の藤原不比等は、最高権威の大臣の要職にあり、実際に『書紀』には彼の視点からの記述がなされている事は指摘されている。『書紀』は、4年後の聖武の即位年を考慮に入れて、その紀年構成をなしている。

『書紀』が書かれる時点で、参考にできる古い史書は少なかった。推古朝の「天皇記」、「国記」、また「臣連伴造百八十部并公民等本記」は知られているが、その類の資料が不足していた。従って、上古代史を書き上げる作業は、神話、記録、伝承、また各氏族の持つ記録や口承をも参考に行ったであろうが、史書として一番肝心な編年体に組み上げる時間の問題があった。

新たに、しっかりした長暦を創りあげて、そこに記録なり伝承を適宜、配していくことになる。その時基準になったのが天皇の聖数である。

聖武の誕生年から即位年までの節目の時点を見てみよう。そして、聖武天皇はどうして724年に即位したかを明らかにしたい。

まず、神武とは、

神武崩御年（前585）

⇨ 1309年（一七年×77）

聖武即位年（724）

また、

神武誕生年（前711）

⇨ 1425年（一九年×75）

聖武立太子年（714）

となっている。神武崩御年が、先に挙げたように元明、元正とも聖数関係をもっていたが、聖武とも一七年での関係をもっており、実に驚くような紀年構成を見せている。

右に神武との一七年関係を示したが、これは、先に示した神武から天武・持統・元明へとつながる関係線の延長線上に位置していることになる。つまり、

神武崩御年（前585）↓天武即位年↓一七年↓持統即位年↓一七年↓元明即位年の先に、

元明即位年

⇨ 一七年

聖武即位年（724）

と、聖武までもつながっている。

次に聖武の垂仁天皇との関係を示しておく。

垂仁即位年（前29）

⇨ 730年（三六五年×2）（注5）

聖武誕生年（701）

また、

垂仁立太子年（前46）

⇨ 760年(一九年×40)

聖武立太子年(714)

となっている。垂仁が天皇家祭祀の聖域である神宮を創設した天皇であるので、特に注意されたのである。

この神武から聖武までの一七年で結んだ関係線は特別に組まれた「威霊再生の関係」としてよい。わたくしが特に「聖数ライン」と呼んでいる関係線である(もうひとつの「聖数ライン」は、神武即位年から文武即位年を結ぶ二三の線である)。

注意すべきは、この神武から天武へと、神武から文武への右のふたつの関係線の上には、他のどの天皇の即位も許していないことである。そのために、その線上には、天皇空位年が複数生じてしまっている。つまり、神武の威霊を、直接に天武の即位年に、また文武の即位年に連絡させている。そして、この神武からの「聖数ライン」の延長線上に聖武は即位していることになる。まさに724年は、千載一遇の吉年に当たっているのだが、この当り年は偶然のものではないだろう。

右の他にも、聖武は『書紀』完成期に偉大とされた他の天皇との「威霊再生の関係」を持つ。

継体崩御年(534年||或本)

⇨ 190年(一九年×10)

聖武即位年

天智即位年(667年||或本)

⇨ 57年(一九年×3)

聖武即位年

右の二つの関係は、いずれも「或本」記載の年次との関係である。これは『書紀』がほぼ完成した時点で、他の資料「或本」が出てきたことを思わせる。しかし、事はそんなに単純ではないだろう。むしろ、聖武を継体や天智と結び付けたいために、「或本」として挿入したものであろう。「或本」挿入に作為を感じ取られる。

この「或本」故に、聖武がこの継体と天智との「威霊再生の関係」をどれほどに深く信仰していたか、その程度については、別稿に論じた(注6)。

聖武は、一九年関係だけ拾っても、他に、綏靖崩御年(前549||安寧即位年)、安寧崩御年(前511年)、敏達即位年(573年)、舒明即位年(629年)と連なっている。これだけ見ても、『書紀』完成期の皇太子(聖武)に、「威霊再生の関係」の面からどれ程の配慮がなされていたか理解できるだろう。

聖武の立太子年もその即位年も、『書紀』の創り上げてきた紀年構成の上で決定されたのである。古代史学の中では、聖武の即位が724年まで遅くなった事を取り上げ、それを政争史の中で捕捉しようとする説もあるが、その政争は皇位を脅かすようなものではなかった。

『書紀』は、次の皇位を約束された聖武を、祖霊との「威霊再生の関係」で飾り立てたのである。

三 孝謙天皇の即位年

以上の事は、はじめに書いたように、拙論発表のたびに、触れてきたところであって、新しいものではない。ただ、わ

が国の古代史、その紀年構成が、天皇の聖数を用いているという立場からの発言が、今までの古代学になかった故に、わたくしは、紀年構成の基本的な見方を繰り返し説明しなければいけないのだ。

ここから新見となる。

ここまで見て来たように、聖武は「威霊再生の関係」に恵まれていた。『書紀』は、聖武にとっては聖書であった。聖武は、祖神たちの威霊を一身に受けていることに、感激したことであろうが、また、この身に余る聖数関係のために、振り回されることになったのである(注6)

さて、孝謙天皇は、聖武からの禪譲である。聖武は、孝謙に譲位するにあたって、「威霊再生の関係」を考慮しないはずはなかった。『書紀』が創り上げた聖数での関係が、孝謙の即位年にどのように絡んでいるか、そこを見てみる。

孝謙は、天平二十一年(749≡天平勝宝元年)に即位した。即位時点を考慮するに際しては、やはり神武との関係と天武との関係が必須の件、一番に望まれたであろう。新たな天皇の即位は、原初への回帰であり、地上の秩序の更新を求めるものである。

孝謙の即位年は、神武とは次のように二三という聖数関係の年次に当たっていた。

神武崩御年(前585)

⇒1334年(二三年×58)

孝謙即位年(749)

この関係線によって、孝謙も原初の輝きを帯び得たのである。

そして、天武との関係は、

天武即位年(673)

⇒76年(一九年×4)

孝謙即位年(749)

このふたつの関係で、孝謙天皇は、遠くは天皇王朝、近くは天武王朝の威霊を継承した立場に立ち得たのである。右は一九年と二三年関係であった。749年のその他の聖数関係を書き出して見る。

二六年関係(52年≡二六年×2)で文武即位年と。

一七年関係(34年≡一七年×2)で元正即位年(元明讓位年≡715)と。

一二年関係(48年≡一二年×4)で聖武誕生年と。

次に、この論考での作業のひとつとして、孝謙天皇の即位年が749年ではなくて、その年の前後であったとしたら、どのような「威霊再生の関係」があるかを、749年の場合と比較するために検討してみよう。

748年とした場合、

神武、天武それぞれの即位年及び崩御年と聖数関係なし。

文武即位年(持統讓位年)から51年(一七×3)

元明、元正とは関係なし。

聖武即位年から二四年(一二年×2)

750年とした場合、

神武即位年とは1410年(二三五年×6)

二三五は「十九年七閏法」の一九年間の総月数である(注7)。

天武、持統、文武、元明、元正と関係なし。

右のように、748年、750年は、749年の持つ「威霊再生の關係」線と比較して大きく見劣りがする。749年こそ祖霊たちの威霊を受け継ぐに、またとない輝きあまる年次であった。

聖武は、祖霊たちに繋がり得て、天皇家の万葉の繁栄を祝福し、約束してくれるこの749年を、次の天皇への譲位年としたのだった。

四 淳仁天皇の即位年月日

次の淳仁天皇は孝謙からの譲位である。758年であった。

天平宝字二年八月庚子の朔、高野天皇、位を皇太子に禪りたまふ（『続日本紀』）。

淳仁は、藤原仲麻呂に擁立されて太子に立ち、天皇になった。

聖武が、この年を譲位の年にするように遺詔を残していたのであった。

この譲位の時点も、即位への吉年、そして好日選ばれたことは間違いない。その「威霊再生の關係」に注目してみよう。

先に神武崩御年から元明即位年までの一七年での「聖数ライン」を挙げ、その先に聖武の即位年のあることを証した。そして今、この758年は、その聖武即位年からの「聖数ライン」の上にあることを指摘する。

元明即位年から見ると、

元明即位年（＝文武崩御年）（707）

⇨一七年

聖武即位年（＝元正譲位年）（724）

⇨一七年

淳仁即位年（758）

である。この關係線だけでも758年選ばれた年であったことは理解されよう。

そしてもう一点。

右に示した一七年の聖数關係に、文武天皇が見えない。しかし、その文武と淳仁との間にも十分な考慮が払われている。文武即位年は697年、この758年は文武即位年から数えると61年を経ている。もし、淳仁の即位がもう1年早かったら、六〇年という、今でもいう還暦の数であり、『書紀』でも聖数として扱っている年数である（注8）。

しかし、大きな約束がなされていた。ここでは、文武の即位日と淳仁の即位日に注意したい。両天皇の即位日は、同日の8月1日である。淳仁の即位日は、文武の即位日に合わされているのだ（注9）（注10）。すると、淳仁即位日は、文武のそれから1日も変わらない満六〇年目を満了した日、つまり還暦を意識したものであったことになる。

淳仁の即位年は、神武から天武そして聖武へと、再生を繰り返してきた天皇霊を意識し、その上に、その即位年の月日は、豊祖父文武を強く意識して選ばれたことになる。

おわりに

『書紀』の紀年は、聖数關係によって組立てられている。この關係は、皇祖たちの威力ある霊力が、ある一定の時間（回歸年数）で再生してくるのであり、後代の天皇たちはその威霊

を継承していくという信仰をみせている。わたくしは、その関係を「威霊再生の關係」と呼んでいる。この信仰に最も影響を強く受けたのは、『書紀』完成時の皇太子、聖武であった。聖武天皇の即位年は、先代たちからの、まさに天福の降ることときその神聖数との關係の上で決定されたものであった。小論は、そのことをまず確かめた。その上で、聖武からの讓位であった孝謙天皇の即位年を聖数關係の面で見たと。そして、その即位年も「威霊再生の關係」を重視したものであったことを確かめ得た。

さらに、淳仁天皇の場合も、「威霊再生の關係」への厚い信仰が見て取れた。それは神武天皇、天武天皇、また聖武天皇との關係の他にも、文武天皇との強い關係を示していた。淳仁の場合は、その即位年は、この年以上の吉年はあり得ない、と言える程に望ましい時点選ばれたものであった。つまり、『続日本紀』の時代も、いや、『書紀』の聖数意識を信仰した聖武時代は、『日本書紀』の創り出した聖数關係によって、天皇の即位年が決定されていたのである。ここまでは、小論で証明した部分である。

ここからは、少し推測を加える。

淳仁の場合は、その即位までの複雑な政治面での事情と絡んでくる。淳仁の即位年は天平宝字二年（758）であるが、その二年ほど前からの政争は驚くほど激しいものであった。

聖武天皇は、天平勝宝八年（756年）5月2日崩じた。同日聖武の遺詔によって道祖王が皇太子となり、孝謙の次の天皇となること約束されたのであった。しかし、王は一年を経ずしてその地位を廃されてしまう。それから橘奈良麻呂等の藤原仲麻呂打倒の謀議、その発覚と続き、結局は、757年に、

奈良麻呂を始め、道祖王、黄文王、大伴古麻呂らは処刑され、さらに右大臣藤原豊成の太宰府員外帥への降格と、政治的な激変が続いた。そして、藤原仲麻呂に擁立された大炊王（淳仁）が757年に立太子、758年に即位することになった。

右は、まさに醜い政争を見せたものであったが、それは、神武から天武へ、そして聖武まで継承してきた聖なるラインの年次にあたる758年が意識されての政争であったのだ。天皇位を欲する側にとっては、その年までには片をつけなければならぬ性格のものだったろうと思う。聖武が遺した次の天皇即位年が見えていたからこそ、そこまでの二年間に激動が走ったのであった。

推断をすれば、藤原仲麻呂が、聖武天皇の遺詔を守ろうとする側に対して、自分の義子であった大炊王を皇位につけるために先手を打ったのである。後に、奈良麻呂謀叛と言われる事件は、実は仲麻呂の謀叛であった。

『書紀』の創った「威霊再生の關係」は、奈良時代の生々しい事件とも絡んでいたのである。

（二〇一五年一月二十二日受稿、二〇一五年三月二日受理）

注

（1）「十九年七閏法」と「三才思想」の数字については、拙稿『日本書紀』紀年の研究』平成十六年 おうふう。

聖数とは、祖霊継承を大事とする古代天皇家が、太陰太陽暦における太陽の再生年数、つまり、三六五や一九、二六などの数字。一九年は、1年間に11日のずれのある太陰と太陽の周期を調整する暦法「十九年七閏法」による聖数。一九年の間に七回の閏月を挿入することで、太陰と太

陽とが、満一九年ごとに、暦の上で同時に再生することになる。二六は、「十九年七閏法」の一九と七との和、つまり、陰と陽との和。「暦数は閏を以て天地の中和を正す」（漢書「律曆志」）、また、「天子は天文を觀、地理を察し、陰陽を和し、星度を撥（はか）り・」（緯書「礼含文嘉」）ともあるが、陰陽の和が、天地の和に必要なことを説く文献は枚挙に遑がないほどである。特に、わが国は、「一七条憲法」に見られるように「和」の世界を理想とした。

三才思想に関わる聖数は一七と二三である。法家思想では、三才の天地人に、それぞれ9、8、6と数字を割り当てていて、天地の和が一七、天地人の和が二三となる。

天武が目論んだ「天武書紀」では、祖神と天武とは、コンマ25などという端数が出るようには組まれていなかったらう。また、「天武書紀」では、初代天皇が神武であったという証拠もない。天武より4代も遅い元正時代になって『書紀』が完成する段階で、いろいろな思惑が介入してきたことを考慮すべき。

西暦で数えると、紀元0年問題がある。神武の即位年は、西暦前659年となる。しかし、『書紀』時代の年数計算は、満計算ではなく数え年による。従って、現在の我々の年数計算に多くは一年加えて計算することになる。

即位した時点で一年目、次の正月は二年目年という数え方で、丁度、生まれた日が一歳となり、次の年の正月が二歳となる数え年の用法なのだろうか。

神武と持統との年数関係は、

神武即位年（前660年1月1日）+1350年（満1349）=持統即位年（690年1月1日）

で、満計算で一九年の71倍であり、「威霊再生の関係」の

一九年間をまるまる満たした関係である。

この「威霊再生の関係」での年数の数え方に関しては、拙著『古代天皇の聖数ライン』第8章（2007年、河出書房新社）に書いたが、その計算法にあまり自信がもてない。

（4） 第二部「天皇空位年の研究」

三六五年関係については、注3出の著書参照のこと

（5） 拙稿「聖武天皇の流離五年の意義」『千葉商大紀要』

（2008年度第4号）

特に、聖武の聖数関係で、継体天皇、及び天智天皇とは或本での関係である。この或本の生じた理由として、「百済本記」の出現があったのであるが、「百済本記」の出現前は、聖武は継体天皇、及び天智天皇ときれいに一九年関係で結ばれていたのである。

九州での藤原広嗣の「反」を切っ掛けとして始まった聖武の「彷徨5年」と呼ばれる57か月（ 19×3 ）の流離、その切っ掛けとなった広嗣の乱は、継体時代の筑紫での磐井の乱の再現であり、継体の、恭仁京、紫香楽京への遷都の意義についても、継体天皇の大和入りまでの恭仁京、紫香楽宮という二つの宮都との関係に触れ、聖武の5年間の流離が、先行天皇たちとの「威霊再生の関係」の実習であったことを説いた。

（7） 拙著『古代天皇の聖数ライン』第8章（2007年、河出書房新社）。

二三五年の適用例としては、『書紀』が用いた二つの暦のうち、元嘉暦は、雄略即位年から持統六年までの使用と重なる事。また、『万葉集』卷一、二の総歌数（現在は234首）は二三五首であったことに触れている。

（8） 六〇年を聖数とした証拠は、上古代の天皇の、9代開化天

(9)

皇、12代景行天皇、13代成務天皇の在位年数が、それぞれが60年となっていること。

同日即位の例（淳仁天皇の即位年月日が文武天皇を意識したことを理解するために、同日即位の関係にある天皇を参考に挙げてみる）。

神武と持統

神武即位年（前660年1月1日）+1350年（満1349）≡持統即位年（690年1月1日）

右の関係は、年数のみを計算すると1350年で聖数での関係を見出し得ない。しかし、同日（1月1日）即位であるから、満計算でいくと、満1349年で、これは一九年×71という関係になる。

垂仁天皇と反正天皇

垂仁即位年月日（前69年1月2日）↓満475年（一九年×25）↓反正即位年月日（406年1月2日）

仁徳天皇と斉明天皇

仁徳即位年月日（313年1月3日）+満342年（一九年×18）≡斉明即位年月日（655年1月3日）

その他、

崩御日が同日となっている例も挙げる。

開化天皇崩御年月日+満684年（一九年×36）↓用明天皇崩御年月日

誕生年月日と即位年月日を同日にしている例、

孝元誕生年月日（前273）+満988年（一九年×52）≡元正即位年月日

誕生年月日が同日となっている例、

懿徳誕生年月日（前553年2月4日）↓満1254年（一九年×66）↓聖武誕生年月日

(10)

など、いずれも一九年の倍数年で結ばれている例を挙げた。このように誕生、立太子、即位、崩御という日を同日として結びつけている。天皇が同一霊格であるという信仰に基づいているのだろうか

なぜ、孝謙の即位日が7月2日であったのか。また淳仁の即位日は8月1日であったのかについても簡略説明しておく。

孝謙の即位日7月2日は年初から数えて209日目（この年は五月に閏があった）であった。この209日目は、

209 ≡ 一九 × 11

で、一九が意識されて選ばれたのだろうか。

淳仁の即位日は8月1日だった。この日は、年初から数えて207日目であった。

207 ≡ 二三 × 9

で、矢張り、聖数が意識されていた。

終わり

〔抄録〕

孝謙・淳仁両天皇の即位年の決定法

—『続日本紀』と聖数(5)—

江口 洸

『日本書紀』で知ることが出来る上古代の天皇たちの即位年、また崩御年の殆どは、『書紀』完成期の天皇たち(天武天皇以降)の即位年を起点として、そこから時間を遡って決められた。その時、天皇が信仰した聖数が用いられた。

上古代史の紀年は、その聖数によって組み立てられている。今まで、『書紀』(天皇史)に聖数意識があり、『書紀』の紀年構成が、その聖数によって組み立てられていることに気が付かないで来た。

古代史研究は、研究の基本となる紀年論から科学的にやり直されなければならない。

わたくしは、この拙論の一、二において、『書紀』完成期の皇太子であった聖武天皇の即位年の決定に聖数がどのように関わっているかを明らかにしている。

聖武以降、その聖数は消滅しただろうか。この論の三、四では、聖武後の孝謙(聖武からの禪譲)と淳仁(聖武の遺詔による即位)の場合を取り上げ、そこにも聖数意識が顕著に働いていることを論じた。

尚、即位日決定にも聖数意識が働いていることにも少し触れた。